# 聞名仏教

第 153 号　　毎月発行
（発行日）2023 年 6 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

## 一声の念仏

佐々木蓮麿

かつて、私の寺から約十キロ離れた部落の一檀家に参ったことがありました。私は報恩講だけだと思って三部経を持たずに行きましたところ親類の人達が沢山参っているので、年忌の仏事であることが分かりました。私の地方では、年忌の仏事には三部経を読むことになっているので、報恩講だけと思って御経を持参して行かなかった私は、ちょっと困って、その家の主人に申しました。

「実は、今日は報恩講だけかと思って御経を持たずに参ったのですが、どうしましょうか。阿弥陀経だけであれば、御経を持たなくても読めるのですが、三部経は御経を持たずには読めませんので困っているところです」と申しました。

すると傍らにいた親族の一人が「ご院家さん、結構です、阿弥陀経一巻読んでいただけば、それで十分です。浄土真宗はナムアミダブツの一声でよいのですから」と言われたので、私はなんだか負うた子に教えられたような気がしたのでありました。

親鸞聖人は「父母の教養のためとて、一遍にても念仏もうしたること、いまだ候わず」と仰せられて、追善供養のために読経をするようなことは極力排せられたのでありました。

が、今日はどうでしょう。真宗の寺院でも寺と檀家とのつながりは、ほとんど年忌法要や月参りの読経であり、寺院の行事においても永代経と言ったような追善供養的の読経が重要視されている状態であります。そのため、私達住職自体も、いつしかそれに慣れて宗祖の精神からはなれて行くことは、まことに親鸞教徒として悲しむべきことではないでしょうか。

ところが俗人の一同行から「真宗は一声のお念仏でよいのです」とズバリやられて一言なしといったところでありました。蓮如上人が「仏法は知りそうにないものが知るぞ」と言われたお言葉を今さらのように痛感せしめられたのであります。

また、あるとき、田舎の檀家の仏事に参りましたところ、そこの主人が言われるには「今日は亡くなった親の大切な年忌でお参りを願ったのですが、長い三部経は読んでいただかなくてもよろしい。その代わりに御法話をゆっくりと聞かせて頂きたい。たとい集まってくる人がなくてもかまいません。私一人が聞かせて頂けば、それで十分であります」と申されたのにはちょっと面くらいましたが、これも負うた子に教えられるような感じを受けたのでした。

まことに親鸞聖人の宗教は聞法と報恩行以外にないと言っても過言ではないでしょう。

（了）

### 佐々木蓮麿『法味寸言』

一、困るというは仏から離れた証拠。
一、やっかいな物のある間は踏みぞこないがない。
一、聞くほかに信がないとは、自分の聞いたことに用事がないということ。
一、御一流は聞き直しのいらぬ法、見直しのいらぬ安心。
一、大往生とは、自分のすべてが如来に取り上げられること。
一、人様のお役に立ったより、お邪魔した方が多い。

# 不安煩悩とお念仏

人生で初めて入院体験をした。四日間の検査入院である。この四月にかかりつけの内科でたまたま詳しい血液検査をしたところ、「前立腺の癌の可能性が高い、絶対に精密検査をしなければならない」と医師から強く言われ、大阪の大きな病院に行ったところ、「生検が必要で二泊三日かかる」と言われて入院したのである。

「生検」というのは前立腺癌の有無を正確に検査する方法である。「癌の可能性が高い」とかかりつけの医師から言われたとき、癌の中で致死性が低いのが前立腺癌と聞いていたから、ガツンときたわけではないが、その時からいささか気分の悪い日が続いたのである。ルンルン気分にはとてもなれない。検査はそんなに楽ではないだろうし、検査結果が悪かったらどう対応したらいいのか、もし転移をしていたらどうなるのか、手術となるとどこの病院がいいのだろうかなど、いろいろな思い煩いや心配が湧くからである。そういうことで、先日生検を受けて退院をしたのである。

生検では検査に先立って下半身麻酔を行う。脊髄に麻酔の注射をするということで、手術台に上がり、横になってエビの様に身体を曲げるのである。麻酔の脊髄注射は強い痛みがあると思っていたので、仕方がないから我慢しようと緊張して待っていたが実際は痛くはなかった。そして検査そのものも痛みはなかった。むしろ検査前に行った浣腸がハードで苦痛だった。生検は患部と思われるところをレーザーの針で十カ所ほど突くため皮膚に傷が付く。だから検査後、大なり小なり血尿が出る。私の場合、他の人以上に血尿が大量に出たので退院を一日延ばさざる得なくなった。何度も真紅の血尿がダーと出るのを見るのは気持ちの悪いものである。検査結果は後日とのことで、もし手術になるならそれに従うほかはない。こうして四日目に帰宅できたのであった。

このような経験をした中で、四月末から大なり小なりうっとうしい日々が続いてきたであるが、そのうっとうしさも変化していくもので、だんだん慣れるものである。まことに「心は万境にしたがって転ず」るのである。

こういう経験をする中で、教えられるのは「**不断煩悩得涅槃**」（煩悩を断ぜずして涅槃を得）という『正信偈』の言葉である。煩悩というのは煩い悩みであるが、貪りや怒りや妬（ねた）みのようなものばかりではなく、不安煩悩が結構大きいのである。煩悩具足の凡夫という煩悩の中身の大きな部分はさまざまな不安の煩悩である。生活不安、病気の不安、死の不安、死後の不安、ことに老化が激しい年代になると病気と死の不安が大きくなるのは当然である。

そういうことで、一生煩悩のなくならない、煩悩熾盛の凡夫と教えられているのは、不安というのは一生なくならない。大小さまざまな不安が生涯続くのが凡夫である。これをまずしっかり認めることだと再度確認することになった。

そういう「不断煩悩」（煩悩の断たない）の凡夫の私に「得涅槃」とは何か。「得涅槃」を、煩悩だらけの人生において「得涅槃」（涅槃の徳の一部である安らぎを得る）と理解するなら、これはこの世の人生生活の上でいただくお念仏の利益である。

日頃念仏に親しんでいると、不安が大きくなるとそれが縁で、より一層お念仏が出て下さる。なんでもないときは念仏はそれほど出ないのであるが、不安が縁となって念仏が出て下さる。お念仏がふいふいと出て下さるなかで、ナムアミダブツのお声によって、私のいのちの底にアミダ仏がましますことが、そのつど知らされて、ほっと一息をつく。すると又、不安が起る。またお念仏が出て下さる。そこに「お前と共にいる」とのアミダ仏のお知らせをいただいて又ほっと一息をつく。こういう生活が続いていくのである。このような念仏生活の連続によって、アミダ仏と私の関係がより一層深まっていくのではなかろうか。だから不安の起るのはますます「アミダ仏が共にまします」という関係を深めて下さる縁になるということである。これが真宗の修行といえば修行である。不安はまさに「念仏助縁」である。木村無相さんの歌に

**ご縁　ご縁　みなご縁**
**困ったこともみなご縁**
**南無阿弥陀仏にあうご縁**

とあるが、その通りである。

ただ不安が起きると、誰しも経験しているようになんともイヤなものである。暗いというか、うっとうしいというか、心がつまると

いうか、圧迫されるというか、とにかく一刻もこれを取り除きたいし、楽になりたいと思うものである。

そこで、そういう時にお念仏を称えてその不安を取り除こうとする。不安を払って楽になりたいのである。そのために念仏をするということにもなる。しかし、こういう念仏は不安煩悩を除く「手段として称える念仏」である。念仏自体はアミダ仏のはたらきそのものであり、アミダ仏の大悲のはたらきであり、アミダ仏の喚び声であるが、楽になろうとし、煩悩を取り除こうとする手段としての念仏にしてしまっているのである。

こういう念仏はアミダ仏の四十八願の中の第二十願の念仏といえる。二十願の念仏は普通、信前の念仏といわれ、念仏を称えて助かろう、称えて信心を得よう、称えてアミダ仏にあおうという、いわば助かるために称える念仏といわれている。これが二十願の念仏であり、いわゆる自力の念仏である。

しかし、アミダ仏にであった後、いわば信後においても二十願的な念仏があり、それが今のイヤな不安を取り除こうとするような念仏である。信後の念仏は、念仏自体はアミダ仏ご自身の現れであり、私の思いや考えを超えたアミダ仏そのものの有り難いはたらきであるが、それを自分が楽になるために行う念仏行にしてしまう。そこに二十願的な念仏になってしまうのである。

ただしかし、こういう二十願的・手段的な念仏を称えたらダメというのではない。ダメと言われてもやまないのが凡夫の凡夫たるゆえんである。

しかし、苦し紛れの念仏であっても、嫌な思いを払うための念仏であっても、こうした手段としての念仏の中に、ふいふいとアミダ仏が顔を出して下さる。「ここにいる、汝を抱いている」とお知らせ下さるのである。アミダ仏の方からお知らせ下さるのである。これがとても有り難い。

私の心は煩悩だらけだから、念仏をも自力的、手段的に楽になろうとして称えることになりがちであるが、そのなかをくぐって阿弥陀様が「汝」と喚びかけて下さるのである。ここでほっと一息つかせていただく。その連続である。

どちらにしろ、その場その場で、その時その時、ただ念仏し、ただ称え、ただ聞くばかりで、極めて単純な生活である。

親鸞聖人は煩悩を「雲霧」にたとえておられる。青空に雲や霧がかかると美しく明るい空はくもり、いわゆる天気がうっとうしくなる。これは外界の現象のことであるが、内界である心の世界においても、煩悩が起るとそれはちょうど心に雲や霧がかかって晴れ晴れとしなくなるのである。雲にも濃淡があって薄曇りもあれば厚い雲に覆われることもある。内心の世界においても心に厚い不安煩悩の雲が覆うとなんともいえないうっとうしくなるものである。このように心の雲にも濃淡があって、薄い雲がかかっているだけであれば、青天でなくてもけっこう気分はよいが心の雲が厚くなると心が憂鬱（ゆううつ）になる。

このことに関して、親鸞聖人は『正信念仏偈』に、

**摂取心光常照護**
**已能雖破無明闇**
**貪愛瞋憎之雲霧**
**常覆真実信心天**

（摂取の心光、常に照護したまう。すでによく無明の闇を破すといえども、貪愛・瞋憎の雲霧、常に真実信心の天に覆（おお）えり）

と仰せられている。この思し召しは裏から言ってみれば、煩悩は雲霧のように心に湧いているが、摂取の心光は常に心を照らして下さるので、雲の下は明るい、と仰せられているといえよう。雲霧の煩悩は心に覆っているといわれるのだから、いつも日本晴れとはいかないし、うっとうしい心は濃淡いろいろ起るけれども、心の底はアミダ仏の摂取の光によって明るい、といわれている。これはいわば、煩悩の心の底に、我が心を照らす摂取の働き（心光）があるので暗くはないと仰せられていると領解される。なおここで「天」というのは、煩悩の凡心を超えていることの譬えであり、私はそれを「底」と受け取っている。

このことと同じ趣きの言葉が勝れた思想家であった西田幾多郎博士（一九二五～一九四五）の歌に、

**我が心　深き底あり**
**喜も憂の波も**
**とどかじと思ふ**

と詠（よ）まれている。これは西田博士が五十三歳の時の歌で、博士の身辺に不幸が重なっていたときの歌である。長男が死に、妻が倒れて重い病の身となり、娘が病床に伏すという三重苦の中での歌で有名な歌である。ここで「憂いの波の届かない底が心の底にある」と言われている点が有り難い。私の心を超えて私自身を掴んでおり、私の思いや苦楽の感情によって動かない、破

れない、いつも私と共にあり、私を支えている我ならざる根柢がある。これが「深き底」である。それがアミダ仏の摂取不捨のはたらきであり、いのちである。

摂め取り掴んで下さっているアミダ仏のいのちが私と共にましますから、憂いの波が起こり、それゆえうっとうしい心が起こるけれども、私の心の底は暗くないといわれるのではなかろうか。まさに「摂取して捨てざれば阿弥陀となづけたてまつる」（浄土和讃）で、私を摂取して下さっているから、うっとうしい雲や霧はいろいろに心に湧くけれども、アミダ仏と共に生き、それに支えられ、苦しみに耐え、生きる力を失わない。喜びは少なくても、アミダ仏がましますゆえに、「ああ有り難い」という思いも時々は起るのである。

今回はささやかな経験を縁として、ありのままを述べたのであるが、これがもし病いが重く、痛みが激しくなれば、不安も増大するというようなことが今後十分あり得る。

その時はどうするか。といっても、それに対して「覚悟する」というような心構えは何の役にも立たない。あるいはそれを「引き受ける」などという自信はまったくない。我が心や思いではとても受け入れられない。我が心はまったく当てにならないからである。

ただイヤイヤながら、仕方ないまま、わがいのちはそのまま運ばれていくのである。私の思いは逃げ出したいであろうが、いのちの事実いわゆる「我身」はふりかかってきたことをそのまま受け取っている。苦痛は苦痛のままに受け、不安なままに今今と生きるのであろう。

今今と生きさせているいのちの働き、それはアミダのいのちの働きであり、それはどこまでも私に一瞬も離れず、生き続けているのであって、そういう意味で行きづまりはない。それこそ妙好人の吉兵衛同行（一八〇二～一八八〇）が「一日一日片づいていく、気色のいい話や」というように、苦しい痛いままで一日一日片づいていくばかりであろう。いつでも今ここに私をあらしめ乗せているいのちの働きが、過去から現在から未来へと一瞬も休むことなく働いている。このいのちは死なない。この力によって、今まで心が何度も行きづまるようなことがあったにもかかわらず、実際は行きづまることなく、今此処に生きている。

そして死は、はかりなきいのちの取る相の一つであって、いのちはなくならない。

このような中で、はかりなきいのちのアミダの声をお念仏において聞くばかりである。我身のいのちを運んでいるはかりなきいのちなるアミダは「汝と共にいる」と仰せ下さり、「我が国に生まれるとおもえ」と仰せ下さる。いわゆる「汝を幸あるところ（極楽・浄土）へ連れてゆく」とのアミダのお声を聞くばかりである。アミダ仏の「連れてゆく」の仰せが南無阿弥陀仏である。

死を宣告されるような辛い状態にはなったことがないので、なんとも言えないが、「痛い、しんどい」の状態が続く中で、南無阿弥陀仏の「抱いている、浄土に連れて行く」の仰せを聞くばかりであろう。

「幸あるところ、幸せな領域へ連れていく」の仰せは単なる慰めではなく、確実性があることは、アミダ仏が私をつかんでいることが今ここで知らされるからである。アミダ仏のいのちの外に出ることもできねば、出る必要もなく、アミダ仏に摂（おさ）め取られていることを知る信心の智慧によって、「間違いなく浄土に生まれさせる」の念仏の仰せは確かなことといただけるであろう。

重篤な状態になったことがないのでなんとも言えないが、最後は「苦しい苦しい、痛い痛い」の中で終わっていくのであろうが、しかしどこまでもアミダ仏のいのちに掴まれつつこの世を終わるのであろう。「喜びつつ安らかに死ぬ」などというような、昔の聖者や妙好人などの姿は自分には期待しない。どこまでも煩悩のかたまり、こわがりの私だから。

私のいのちにまでなって下さっているアミダ仏のいのちはどこまでも行きづまることなく、死の扉は開かれている。「この世の終わる時は浄土の開かれる時である」とのみ教えを始終聞かせていただくばかりである。

大変信心の深かった今井昇道師は日頃、「愚かな凡夫である私はこの世の終わりには凡夫往生の見本となって、苦しい・痛い・辛いだけの中で終わらせていただく」と仰っていました。ところがいよいよ実際の臨終の時に、今井師は嬉しさで喜びが湧き上がってきて往生を遂げられた、と佐々木蓮麿師が私に話して下さったことがある。まことに羨ましいことである。（了）